

雑誌の大きさ

雑誌をつくる場合、四W一日が当然考慮される。誰に、いつ、どこで読ませるか、何をどんなふう読ませるか、とくに商業雑誌ともなると、生活がかかってくるからそのことに一層腐心することになる。

そういう意味で、雑誌のカタチもまた大事である。雑誌のカタチひとつで読まなかったり、読まれるようになったりすることもあると思う。雑誌制作の現場は知らない。しかし、つくられた雑誌の大きさから、その編集意図がみえてこないか――

ここでは、一九八二年五月二八日から六月二日までの六日間に、大宅文庫に寄贈された雑誌113種のうち、商業ベースにのった96誌について調べた。調査数は少ないが、ある程度の傾向はでたように思う。

96誌を、A5よりも小さいもの（以下㊦と略）、A5、B5、A4（A4変型、ABも含む）、A4よりも大きいもの（以下㊧と略）、の五つのサイズに分けて調べたら下の表のようになった。

以下気づいたことをいくつつか――
★B5、A4、A5、㊦、㊧、の順に多かった。なかでもB5が全体のほぼ半数を占め、今の日本の雑誌の大きさは、B5が一般的だと思われる。ただ、調査期間を六日間に限ったことで、A5サイズが多いと思われる月刊、季刊

誌など刊行頻度の少ないものが対象からはずれたこともあり、実際はA5がもう少し多くなると思う。

★各サイズの平均ページ数については、㊦のアサヒグラフ（74ページ）を除けば、判型が大きくなるに従ってページ数が増えるという傾向になった。ただし最近では、良質の紙を使ってツカを出さないようにしているものも多く、ページ数が多いから厚い、とは必ずしもならないようだ。

★96誌のうち、昭和50年以降に創刊されたものは28誌で、これらの大きさを調べるとA4・20誌、B5・7誌、A5・1誌であった。これからわかることは、新しく創刊された雑誌ほど大きなサイズのものが多くということである。最近創刊された雑誌もやはりこのような比率になると思われる。雑誌はだんだん大きくなっていくのである。

★でも、いつ頃から雑誌は大判化してきたか――。大宅文庫には約二千三百種類の創刊号のコレクションがあり、これを年代順に並べてあるのだが、これを見てみると、明治から敗戦まではほとんどA5判であったが、戦後すぐの頃から五、六誌に一誌はB5が混じるようになり、昭和30年代の半ばにはほぼ同数になっている。以後逆転し、

40年代の初め頃からA4が出てきて、現在下の表のような比率になっている、といえそうだ。このことは、長く続いた婦人雑誌の判型の移り変わりをよくもわかる。例えば、大正六年の創刊からほぼA5判の大きさであった『主婦の友』は昭和31年3月号からB4に変わり、さらに42年1月号から現在のA4（実際はAB判）に変わっている。

★刊行頻度でみると、いちばん一般的なものである月刊誌は、やはり種類数とほぼ同じ割合になったが、週刊誌は圧倒的にA5のほうが多かった。A4判の週刊誌はほとんどが女性誌である。★表にはできなかったが、判型べつにみると、㊦――『うえの』（タウン誌）

『小さな雷』（古美術の専門誌）の二誌。A5――『寶石』『週刊時事』『諸君』『話の特集』など一般総合誌が目だし、専門雑誌も多いが、どちらかというと歴史、宗教、思想、教育、など固い分野のものが多く、『TVガイド』『ミュージックマガジン』などもある。概して字がビッシリという感じ。B5――月刊誌と週刊誌がほぼ半分ずつ。

『応用機械工学』から『コンパットマガジン』までさまざまだが、経済誌が11誌と目だった。経済誌は『経済評論』や『経済往来』など少しのA5サイズを除けばほとんどこのサイズではなからうか。また、最近『かくしん』がA5からこのサイズになった。A4――断然女性誌が多く、半分の14誌がそうである。他もやはり『ブルータス』『私の部屋』『ゴロー』『明星』など、生

活、男性、若者、芸能、趣味などの柔軟い（？）分野のものが多く、良質の紙を使ったものが多く、ビジュアルである。A5を硬派とすればこちらは軟派といったところか。

雑誌が大判化した要因については、映像世代が増えた、印刷技術が発達した、などいろいろあるようだが、「同様に見のがせないのは広告面の問題である。効果のある広告は、やはり大判の美しい印刷の、比較的よい読者層をもった部数の多い雑誌が、いちばんだとスポンサーたちは考えるわけである」（『週刊言論』昭和41年7月27日号）

大きさ		㊦	A5	B5	A4	㊧
種類	数	2	18	47	28	1
平均	ページ数	87	178	182	208	74
昭和50年以後創刊のもの		0	1	7	20	0
刊行頻度	月刊	2	12	24	20	0
	週刊	0	2	21	3	1
	その他	0	4	2	5	0